

タンザニアのハニー・コレクター

やつかはるな
八塚 春名

民博 外来研究員
日本学術振興会特別研究員



煙でいぶしてハチを追い出しミツをいただく



甘くてキツイハチミツ酒



樹上に設置された養蜂筒



土中から掘り出したハリナシバチの巣



使い込んだ養蜂筒を花嫁の実家へ運ぶ

村のもてなし

タンザニアのど真んなか、乾燥した埃っぽい地域と称されるドドマ州に、サンダウエという人びとがいる。わたしは二〇〇三年以来、サンダウエが自然環境をどのように利用しながら生活しているのか調査を続けてきた。彼らは一五〇年ほど前までは狩猟採集を基盤として生活してきたと考えられてきたが、じつはこの地域では昔から、狩猟採集民としてよりもむしろ、ハニー・コレクター（ハチミツ採集者）として名を馳せていたらしい。そんな彼らご自慢の、ハチミツにまつわる話を紹介しよう。

ハチミツは、ハチが蜜を集める花が咲き終わった時期が採集期となり、この地域では二月四〜六月、一〇月と一年に三回、それぞれ異なる花のハチミツが採集できる。そのころには、訪問先の家々で、ボールになみなみと入ったハチミツとスプーンを手渡される。これは最上級のもてなしだ。しかし、スプーンを使い、まるでスープのようにハチミツを食べることに慣れないわたしは、ありがたいやら、苦しいやら、

いつも苦笑い。結局、食べきれずに降参してしまう。ハチミツは、夕食のおかずとして登場することもあれば、ハチミツ酒となって人びとの宴の主役になることもある。

村でハチミツをえる方法には二通りある。ひとつは、男性が丸太をくり抜いて作った養蜂筒を樹上に設置し、そこに棲みこんだミツバチは、新品のものは使えない。何度か使い込み、ハチが巣をつくることを確認した、年期の入った養蜂筒こそがよいとされる。

ハチミツと世界経済

蜜をとる養蜂で、もうひとつは、樹洞や地中に巣をつくるミツバチやハリナシバチの蜜を採集する方法だ。一度に大量に採れるのは前者の蜜だが、地中に巣をつくるハリナシバチの蜜は絶品だ。ハリナシバチの蜜を食べるとしばしば腹を壊すが、このハチミツは、腹のなかの汚いものを体外に排出する葉の役割も担っているとサンダウエは考えている。

婚資は養蜂筒

こんなサンダウエ社会には、養蜂をめぐるユニークな習慣がある。男女が結婚する際に、男性側は女性側へ婚資として家畜や現金を支払うのだが、それらに加えてハチミツ採集のための養蜂筒を最低ふたつ、両家の伝言役を務めてくれた人へ支払わなければならない。婚資の内容は、社会によって、また、時代に応じて変化する。家畜や現金を支払う習慣はアフリカの多くの社会でみられるものの、養蜂筒を支払うという例は非常に珍しい。

養蜂筒の形や材質、設置方法もまた、地域によってさまざまだ。婚資として利用するサンダウエは、すぐに壊れるようないかげん養蜂筒は決して作らない。材にこだわり、硬く、重い樹種を選択する。選んだ丸太を縦ふたつに割り、内側をくり抜く。そしてふたつを上下に合わせて両端をくり、樹上に横長に設置する。あとはハチを待つのみだが、婚資に支払う場合



養蜂筒をつくる少年

こんなふうに、ハチミツとゆかりの深いサンダウエだが、彼らのハチミツが町まで売られていくことはほとんどない。タンザニアでは、西部のタボラ州がハチミツの一大生産地として有名で、国内どここの市場に行ってもタボラ産のハチミツが並んでいる。自然条件に大きく左右されるハチミツを、安定して大量に生産することは難しいが、タボラ州には、優良な蜜源となるマメ科樹木の林が広がっている。また養蜂は、ハチが棲んでくれるように筒を管理する人の努力も重要だ。タンザニアでは、自然条件と人の労働力の両方がそろったタボラ産のハチミツが、ハチミツ市場の圧倒的シェアを占めているのだ。最近では、中国企業がタンザニアにハチミツ工場をつくり始めた。タンザニア各地に養蜂箱を設置し、オーガニック・ハニーとして欧米へ売り出すという。サンダウエが暮らすドドマ州も、どうやら養蜂箱の設置地域として選定されているようだ。タンザニアのハチミツが世界中の私たちの食卓をにぎわすことは、とてもうれしい。ただ、中国企業がどのようにこの事業を展開していくのか、現地のローカルな養蜂と生産段階でどうすみわけるのか、注目していきたい。